

長期「ひきこもり」への行動分析学的理念に基づいた援助 —ファーストステップ・ジョブグループ (FSJG) の実践—

上 田 陽 子

A Support System for “Long-term HIKIKOMORI” Based on the Concept of Behavior Analysis :
“First Step Job Group (FSJG)”

Yoko Ueda

abstract

The aim of “First Step Job Group is to help long-term HIKIKOMORI persons to act of their own free will. For the purpose it is very important to praise whatever they are able to do “now” at home. We have tried to find and provide them with various “jobs” and encouraged them to accomplish them with interest and will. So far, we have got some good results. Each of them has been very active. Seven of them are no more confined to their home. Now they got their new jobs or began to learn whatever they wanted to.

I. はじめに

就学、就労といった社会参加を行わず、自宅を中心とした生活を送る「ひきこもり」の存在が社会的に注目されてからほぼ20年になる。この間、ひきこもりを取り巻く社会的状況は、不登校問題、青少年期問題、家族問題、精神医療問題、就労問題と揺れ、そのたびに、さまざまな議論が展開され、さまざまな援助が示されてきた（近藤, 1997; 斎藤, 1998, 2002, 2007; 塩倉, 1999; 伊藤他, 2001, 2003; 玄田他, 2004; 田中他, 2005; 萩野他, 2008; 齊藤他, 2010）。しかし、さまざまな援助が展開されたとしつつも、必ずしも系統的かつ実効的な支援方法が示されてきたわけではない。ほとんどの支援がその場まで出て行ける本人を対象にしている現状において、支援の場へ「出て行けない」当事者本人や、既存の援助の届かないところで苦悶するひきこもり当事者本人、および、ひきこもっている「子」を抱え、具体的な打開策を得られないまま悩みつづけている家族「親」がいまだ多く存在する。

社会的に注目された当初、20才前後だった当事者本人たちも今は40才前後になり、この年齢層が大きな割合を占めることになった。特に近年は、本人の長期化、高年齢化に伴い親も高齢化し、親亡き後の本人の生活について差し迫った問題として親は一層悩みを深めている。

ファーストステップ・ジョブグループ（以下FSJG）は、2002年に上田によって提案され、当事者家族で結成された「脱ひきこもり支援」グループの名称である。「好ましい結果によって自発的に行動できる」という行動を形成するために、「今ひきこもりのままでできる行動」を認められる環境を創る援助を、具体的には「今ひきこもりのままでできる仕事」を創出し、仕事をする行動の成立の

援助を、行動分析学の理念 (Skinner, 1978, 1990; 望月, 1995; Baer, 1998) に基づいて、地域の社会資源と連携し実証的に展開している (望月, 2009; 上田, 2005, 2009,)。

ここでは、FSJG 結成から現在 (2015 年 4 月) までの実践経過とその支援方法と今後に向けてについて述べることにしたい。

1. FSJG の概要

1) 親が中心になって活動している

FSJG は、ひきこもり当事者本人と親とで構成される「当事者グループ」である。本人たちは「支援の場へ出て行けない・行かない」ひきこもり状態である。当然、親が活動の中心になる。親が中心の活動と言えば、「親の会」が思い浮かぶが、従来の「親の会」は、同じような悩みを抱え、悩みを吐露し、受容、共感の場としてのものがほとんどである。そのような「親の会」も我が子のひきこもりに狼狽える初期の頃の親にとっては必要で助かる存在であり、否定するものでない。

しかし、FSJG はそのような親の会とは異なり、長期化した「ひきこもり」を対象に社会参加に向けて自発的な行動を促していくことを目的としているグループである。

2) FSJG の枠組み

「ひきこもり」という生き難さの状況を、個人の性格や病理といった生物学的属性で捉え、個人の側を変えて現実環境に適応させていく、あるいは、大きな社会構造で捉え、制度や機構を変え、その上で個人を訓練して現実環境に適応させていく、といったものでなく、これらを二項対立的に捉えるものでもない (望月, 2001 参照)。行動を「個人と環境との相互作用」(Baer, 1976; 出口, 1988 参照; 杉山他, 1998) として捉え、「ひきこもり」という状況も環境との関係性の上に生じる現象であると捉える。ここで言う環境とは、行動に影響する人も含めたもの全てである。従って、関わる側の行動も当事者の行動に影響を与える一つの環境として捉えることになる。親の行動も一つの環境として捉えることができる。

具体的な対応を考えていく上で、行動を、「先行状況—反応—結果状況」という単位で捉える。ひきこもりにおいては、「起こす前の状況 (本人の行動・親の行動・周りの状況) —起きた行動—行動を起こした結果 (何が起こったか・親はどう対応したか)」のように適用することになる。

3) 援助の方針

FSJG における援助の方針は、「援助される人、できない人として、一方的に与えられるのではなく、本人が自分で『やった』という気持ちでできるように援助する」ということで、自分の力で得る (= なんでも自力でというものでない、援助つきでよい) ということである。つまり、自発的な行動の成立を援助するというものである。

援助における目標としては、「一人ひとりの個人において『やりたい』と思える行動を成立させ、さらにその選択肢を増やすこと、つまり、好ましい結果が得られる行動の機会を創り、その機会が拡大していくように」を援助するというものである。

行動分析学の持つ価値観と言えるものに「行動の機会の保障」と「正の強化の環境のなかで暮ら

すことの保障」(Skinner, 1978)の2つがある。

「行動の機会の保障」は、環境への働きかけとしての行動の機会を持つことができるように環境を整えるということである。人を援助する際の原則として「事物を受け取ったり保有することよりも、自ら得るということに「生活の質」の目標を置く」ということ、「一方的に与えられることでなく自ら得る、という条件設定で人を援助する」というものである。

「正の強化の環境のなかで暮らすことの保障」は、本人にとって、社会の中で「やりたい」と思える行動が常に成立するように、維持、拡大していくように環境を整えるということである (Skinner, 1990; 望月, 1995, 2001 参照)。

FSJGの活動における援助の方針と援助における目標は、このような行動分析学の持つ価値観に基づくものである。

4) 活動の基本

援助する際、一般的には、個人の側に問題があるとして、個人の側を変えて現実環境に適応させる訓練がなされる。「ひきこもり」の場合も、現実社会に適応できないと捉え、「できない」に注目し、例えば、「コミュニケーション力がない」「対人関係がうまく結べない」と捉え、「(コミュニケーション力)については何をもってコミュニケーション力というのか、「ひきこもり」本人らに本当にこの「力」がないのか、といった疑問はさておき)だから、その力を身につけよう、身につけた上で世の中に出ていこう、といった支援が展開される。現在、就労支援と呼ばれる「研修」はまさにそうである。「できない」に注目し、援助される対象者の集団という「閉じた社会」のなかで「訓練」していくことである。だからといって、一概にこれらを否定するわけではない、このようにして元気になっていく当事者本人もいるだろうと思う。

しかし、FSJGでは、援助における目標である当事者本人の「やりたい」と思える行動を成立させていくために、今「できる」行動に注目し、それぞれの可能性のある「開かれた社会」のなかで、より良い方向に向け、行動の選択肢が拡大していくように具体的に支援を展開していくことが大事であると考えられる。

そこで、「今」を認め、今ひきこもりのままでできることを支援していこう。それには、「今ひきこもりのままでできる行動」を認める環境を創ろう。具体的には、「今ひきこもりのままでできる仕事」を創出し、「仕事をする」行動の成立を援助していこうというものである。「仕事をする—対価を受け取る」という社会的関係を、先送りすることなく、今、実現するための援助設定である。

では、ひきこもりのままでできる行動の中でなぜ「仕事」行動なのか、については次のように言える。「仕事をする」ということは「仕事をする—対価を得る」ということで、個人と社会との交換関係である。また、「仕事をする」ということは、援助を必要とする人だからといって「一方的に与えられる」のではなく「自分の力で得る」ということである、このように「仕事」の配置は、活動の根拠としている行動分析学の持つ価値観に重なるものである。

そして、「ひきこもり」当事者の生活に思いを至らせば、強化随伴の無い日常でそれまで持っていた行動も生起しなくなっているのかもしれないと考えられる。また、従来の援助に違和感や距離を感じ持っているのかもしれないと推測できる。今でこそ就労支援に注目されているが、これまでは基本は「居場所」であった。その呼びかけは「参加するだけでいいよ」「何もしなくてもいいよ」がほとんどである。この呼びかけだから参加できたという本人もいるだろうが、逆に、このような呼

びかけだから参加し難いという本人もいると思われる。「何もしなくていい、参加するだけでいい」と誘われて参加し、身の置き所がなくて「来なければよかった」といった経験が我々にもあるはずだ。それよりも、例えば、具体的に作業を手伝ってほしいといったような呼びかけなら、場所、作業内容、自分にできるかどうか、などを想像できるし判断もつく。「何もしなくていい、参加するだけでいい」は、実は行動の機会が提供されない状況となってしまう場合もあり得るのである。

また、一見、風のような生活を送っている長期「ひきこもり」当事者であっても、無為無策に日々を送ることに焦燥を感じていることはともに生活をする家族として容易に想像できる。その中で、「仕事」に関しては、本人たちの生活からもその志向を伺えることがある。以前一度だけ経験したアルバイトを繰り返かえし嬉しそうに話す本人や、以前一度だけ手伝った親戚の仕事の賃金の袋を今も大事にとっている本人や、家庭内での家事手伝い（家族用の料理）行動ならば進んで行い維持している本人の存在が親の報告にある。

このように「個人と社会との交換関係」「与えられるのではなく自分で得る」ということと「ひきこもり」当事者の日常生活からみて「仕事」の配置による援助が考えられるのである。

また、行動分析学では、精神病院での停滞してしまっている入院患者の自発的行動をひきだすものとしてトークンエコノミー（Ayllon & Azrin, 1965）の研究がある。

行動を形成するための手段としてトークンエコノミーを捉え、そのような使い方（Kahng, et al, 2003）が現在も多くあるが、Ayllon & Azrin（1965）のこの研究では行動を促す機能として捉えることもできる。仕事リストの中から患者自らが選んだ仕事を行ないトークンを得る。患者はトークンをさまざまな「今できている行動の機会」と交換できる。自発的行動を強化するという目的に沿って言えば、トークンの交換対象になる仕事行動を形成するものではなく、患者の日常の行動の機会となるさまざまな「今できている行動」の頻度を上げ維持させるというものである。

「社会的行動」が自宅の中で停滞してしまっている「ひきこもり」に対しても、「仕事」の配置による援助を、仕事行動を形成するための手段でなく、今できる行動を促す機能として捉えることができる。

だから、ここで言う「仕事」は就労に向けての訓練でもなく、治療的活動でもなく、「ひきこもりのままでできる」社会的行動としての仕事である。やってもやらなくてもいい、途中でやめてもいい、ドタキャンも OK、といったような今「ひきこもり」のままでできる仕事、言わば「ムシのいい仕事」である。選択肢からの撤退を含めるということは、言葉を換えれば、本人が決めることを尊重した状況の提供（Nozaki & Mochizuki, 1995 ; Baer, 1998）と言える。

基本的には、「親」が創出した仕事（家事手伝いから始まる）あるいは受注した仕事を我が子ではなくグループの他者の「子」に提供するという関係のなかで、家族という閉鎖的關係から脱した社会に開かれた最初の仕事行動を成立させ展開させていこうというものである。報酬はグループから支払う。それによって、「仕事をする - 対価を受け取る」という社会的關係を実現することになる。

II. 実践方法

1. グループの成り立ち

2002年春、「ファーストステップ・ジョブグループの提案」として、ドーナツトーク社発行の機関

誌『kid』(70号)誌上や、親の会、および、援助職者による「ひきこもり」家族対象の講演会などで提示し、参加者や関心のある人を募った。行動分析学会ニューズレター(2002年,28号)でも概要を紹介し、関心のある人や意見を求めた。また、心理学講座(武藤,2002)においても概要を紹介し、関心のある人や意見を求めた。

2002年8月初旬、説明会を開き「ファーストステップ・ジョブグループの提案」にそって趣旨説明をした。その説明会参加者のなかの賛同者親子5組で8月末グループを結成し、翌9月より活動を開始した。結成時(2002年8月)は親子5組であった。現在(2015年4月現在)は親子7組である。7組の親子以外に親のみ参加の3名を加えて、構成メンバーは本人7名、親10名である。この3名親は、本人(子)が元気になりFSJGを卒業していった後も、新しく入会した親に先輩親として得たものを伝えていきたいということで残っている。グループ構成数はメンバーの入れ替わりがあっても親子5組~7組で推移している。

2. 対象者

かつて、「ひきこもりとは」と定義や概念がたびたび議論された(近藤,1997;斎藤,1998;塩倉,1999;伊藤他,2001,2003;荻野他,2008;斎藤他,2010)。「ひきこもり」と「精神医療」については専門家間で議論が尽きない。しかし、「ひきこもり」という言葉があまりにも一般化した現在、「社会参加をしていない状態が6ヵ月以上持続しており、精神疾患がその第一の原因とは考えにくいもの」(斎藤環,2011)とのくくりで捉えるのが最も適していると思われる。

そのような「ひきこもり」のなかで、FSJGでは長期化した「ひきこもり」を対象にしている。FSJG結成時(2002年8月)は親子5組、当事者本人(5名)の年齢は18才~40才、ひきこもり年数は8年~20年である。ひきこもり年数というものは「そう言えば、あの頃から様子が・・・」というように始まるものなので、正確に言い切れるものではない。現在(2015年4月現在)は親子7組、当事者本人7名、年齢は29才~45才、ひきこもり年数は10年~22年である。長期化する中で、親は全員が支援団体、相談機関へ行ったことがある。本人は、かつて支援団体、相談機関へ行ったことがあるが今は行っていない、あるいは、全く行ったことがない。さらに、本人について言えば、外出行動がほとんどない本人から、一人で外出できないが家族とならある特定の場所へ行ける本人、一人で外出できる本人(本人自身の目的のある場所へ、月に数回の頻度で)まで含まれる。

3. 具体的な実践方法

1) 仕事の創出

月1回例会を開き、それぞれの家庭から提供された仕事、外部からの受注仕事、見合った仕事、それら仕事についての内容、個別の手続き、賃金の検討など、仕事メニュー掲載に至るまで具体的に検討していく。

見合った仕事については、記録シート「『起こす前の状況(本人の行動・親の行動・周りの状況)』—『起きた行動』—『行動を起こした結果(何が起こったか・親はどう対応したか)』を記入」を用いての各自の報告から、そこで生じた行動について、「今できる仕事」として創りだせる可能性を検討し、そこから「見合った仕事」を創り出すことにつなげていく。また、観察することで、親はこれまで思いもしてなかった我が子の行動に気づくことになる。「(我が子の)できる」を見つけることになり、そこからも見合った仕事の創出につながる(上田,2010)。

2) 仕事メニューでの仕事の提示

まず、例会で挙がった創出仕事や受注仕事を仕事メニューの形にして毎月定期的に本人宛に郵送する。この仕事メニューに関しては重要な点が2つある。

その1つは、「繰り返し」である。仕事メニューには12件ほどの仕事を載せる。そのうち新規仕事は3件ほどで、他は繰り返し載せることになる。今はやりたくなくても、あとで「やりたい」と思うこともある、「やりたくない」と言った途端に「いや、やっておけばよかった」と思うこともある、数か月後に「やってもいいな」と気が変わることもある、そのように「やってもいい」と思った時はいつでもその仕事が目前にあるように、ということで繰り返し提示する。また、毎月定期的に郵送することも繰り返しであり、それによって本人はFSJGのシステムを理解していくことになる。そしてまた、今、断っても次が保障されているということは、今、決断し易いのである。このように「繰り返し」は大事になる。

もう1つは、選択肢に「否定の選択肢」がある(Nozaki & Mochizuki, 1995)ことである。仕事メニューには「今はやりたくない」「返事をしたくない」「この方法に参加したくない」という否定の選択肢を提示している。この否定の選択肢は、本当に本人が望んでいることなのかを本人が表明しやすいように工夫し確認する方法として大事なものになる。「そうではない、それは嫌なのだ」と本人が異議を唱えることをできるように工夫して、はじめて本当に本人自身が「やりたい」ことを反映させることができる。つまり、「本人が決めることを尊重する」「本人が望むことをする」援助(Baer, 1998)を展開する上で重要になる。

3) 仕事行動の成立

本人は仕事メニューの中の「やってもいい」仕事を選択し、それを援助つきで実行し、報酬を得る、ここまでをもって仕事行動成立としている。報酬は、即、本人宛に現金書留で送金する。この賃金送金方法は、確実に本人手元に現金が届くためにと考えたからである。

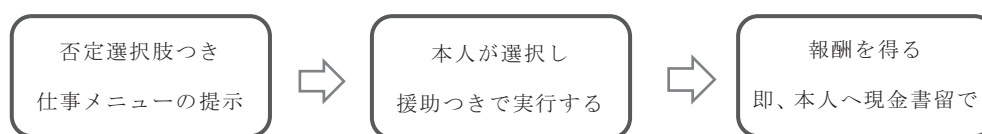


図1. 仕事行動成立

ここでの「援助つきで実行する」の「援助」は、「ひきこもりのままでできる」行動を成立させるために環境を整えることすべてを指す。手を添えて「こうするんだよ」という援助を考えられるかもしれないが、「ひきこもり」に関しては、それよりも環境を整えるということが大きい。例えば、「朝早く起きられない(通常の始業時間に間に合わない)」に対する援助としては、「昼からでもOKだよ」とか、本人が起きられる時間から逆算して始業時間を設定するということである。ちなみに、FSJGの本人たちは、このように設定された時間なら普段より早目に自発的に起床し、仕事行動を成立させている。

次に、報酬についていえば、仕事賃金は「大1000円～」「小500円～」と設定している。大・小の基準は大雑把で曖昧である。「途中でやめてもいい」と設定しているのであり、「途中でやめたか

ら、あなたは仕事をしなかった」ということにはならない。「やってもいい」という仕事をする行動を評価しようということで、仕事完成の評価ではないのである。きちんとした基準の設定は不便で不必要なのである。

4) 仕事内容

仕事内容は、他家の家事手伝い、他家からの内職、見合った創出仕事、外部からの提供仕事、外部施設利用仕事、外部仕事といったように拡大していく。しかし、必ずしもこの順番で提示するものでない。仕事メニューにはこれらの仕事をランダムに並べ提示している。また、同じ仕事であっても週単位から月単位へと拡大していくこともある。さらに個々の本人の状況によっては自宅の家事手伝い（例えば、風呂洗い）から始めることがある。

表 1 仕事例

換気扇掃除・物置片付け・英論文和訳・英絵本和訳・封筒貼り・ガラス補強シール貼り・算数ドリル添削・修正シール貼り・猫型シール切抜き・キャンプ場ペンキ塗り・PC 生徒役・プラモデル作製展示・畑収穫手伝い・苗立札作製・野鳥さえずりを CD に・受付用紙作成・マグネット彩色・発送作業手伝い・PC データ入力・産直野菜買物代行・フリーマーケット手伝い・作業所スタッフ手伝い・NPO スタッフ手伝い・ビデオを DVD に変換、使用済みインクカートリッジ仕分け作業 手書き原稿をワードで編集、説明書原稿修正、リユース食器洗浄 など

Ⅲ. 経過と結果

1) 経過と結果

結成当初はほとんどグループ内仕事だった。しかし、親子 5 組で考えた仕事は頭打ちになり、仕事内容がマンネリ化していった。それに伴い仕事行動も停滞していった。そこでマンネリからの脱却、活性化を図るということで FSJG 説明会をもった。その説明会に参加した精神科医院から「このような仕事なら提供できる」と提供されたのが、その医院に併設された作業所の仕事「作業所スタッフ手伝い」である。この外部仕事が提供されるようになると、そのような仕事なら提供できるということで他の個人、団体からも提供されることになった。このようにしてグループ内仕事からグループ外仕事へと選択肢が拡大していった。選択肢の拡大につれ仕事行動の成立も増えていった。

この最初のグループ外仕事「作業所スタッフ手伝い」(Y・NPO 法人) を本人 1 名が選択し、仕事行動は 6 ヶ月維持・継続された。次に、より選択肢の拡大となる「NPO スタッフ手伝い」(K・NPO 法人) を選択肢の一つとして仕事メニューで提示すると、本人はそれを選択し、この仕事行動も維持・継続された。翌年の 2006 年にこの 1 名が FSJG を卒業した。2011 年後半から 2012 年前半の間においては、これまでのメンバーが卒業し、新メンバー 3 名入会し、メンバーが入れ替わった時期であり仕事行動が再び停滞した。しかし、その後、それぞれが「やりたい」仕事を選択するようになり、それ以降、複数の仕事行動が成立している。そのうちの 1 名は 2014 年に卒業した。最初にグループ外仕事を経て 1 名が卒業してから 8 年間で 7 名卒業している。1 年余り毎に 1 名卒業していることになる。FSJG の卒業とは、FSJG 仕事以外の「仕事」に当事者本人が自発的に参加するようになった時点である。もちろん、「復学」もいつでも認めている。尚、自発的社会参加という意味では

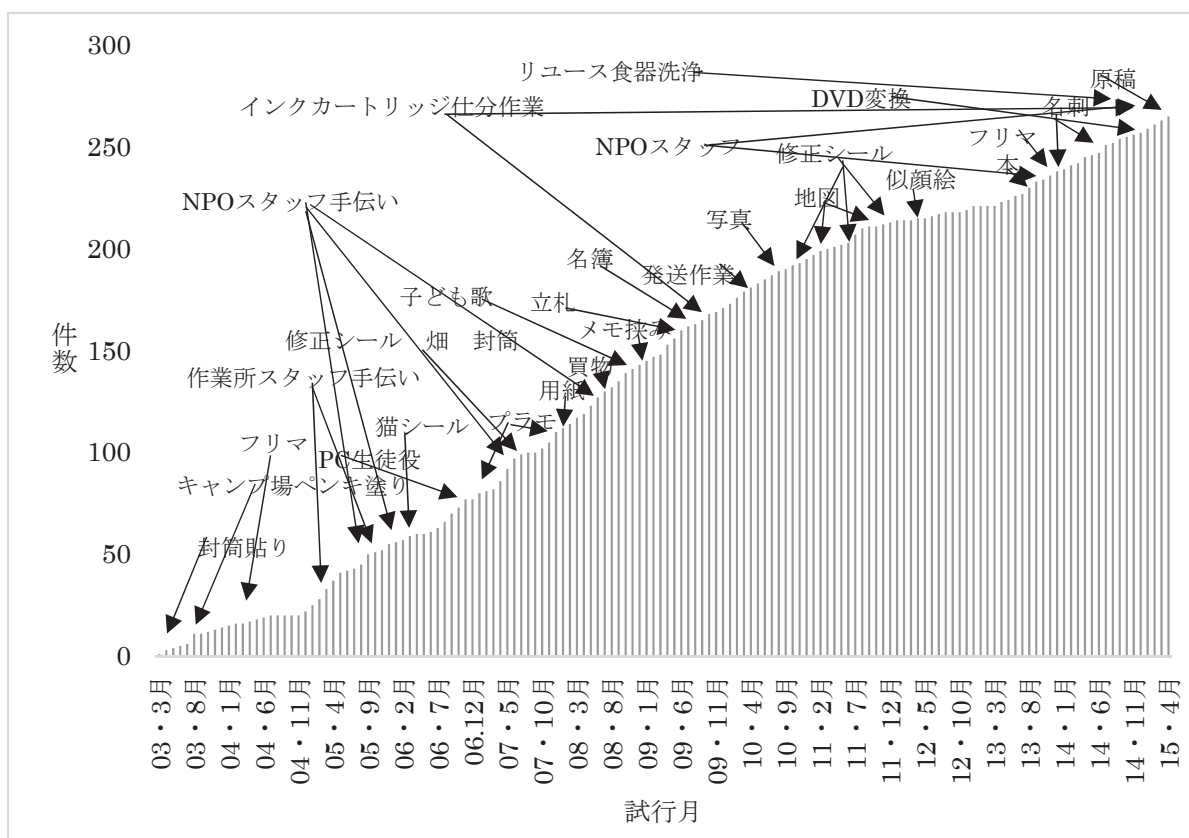


図2. グループにおける仕事行動成立の推移（累積グラフ）と主な仕事内容

「就労」に限らない。「学びの場」を選択した本人もいる。

また、地域の連携先としては、前述の2つのNPO団体（Y・NPO法人、K・NPO法人）とT・NPO法人、E・NPO法人があり、それぞれに仕事「使用済みインクカートリッジ仕分け作業」、仕事「リユース食器洗浄」の提供を受けている。この4団体以外にも個人、団体、大学等から協力を得ている。

そして、図2「グループにおける仕事行動成立の推移と仕事内容」のように成果をグラフという形でオープンにしている。このように援助の試みと成果の関係について公開することは、数値そのものでなく、どのように変化していったかを検証し、さらにより良く実践していくために、また、地域の社会資源との連携の際に、必要なものと考えている（望月, 2007）。

2) 具体的事例

当事者Aの場合を例に挙げ、「ひきこもりのままでできる仕事」の創出および仕事行動の推移について述べることにする。尚、事例の記載に際しては了承を得ている。また、個人情報保護に配慮し一部架空の表現に直している。

グループ参加時点での年齢は30才前半、ひきこもり年数はほぼ14年で、この間、外出行動は一度もない。生活においては、決まった額の小遣いを親が本人名義の銀行口座に振り込み、本人がインターネットで自分用の必要なものを買ひ、その口座から支払う、日用品は親が家族のものと一緒に買う、ということで家の中で生活は完結していた。

グループ参加後3ヵ月の試行期間（FSJGの方法が我が子に適しているか、親自身が活動に参加できる

か、などを親が検討する期間)を置いてのち、仕事メニュー郵送を開始した。

しかし、このような状態では、いきなり FSJG 仕事はハードルが高いと考え、まず、自宅内の「家事手伝い」を仕事と設定することから始めた。親が創り出した仕事「風呂洗い」を「腰痛(事実)なので手伝ってくれたら助かる、1回、仕事賃500円」ということで本人に示すとすぐ本人はその仕事をした。親は「ありがとう、助かった」と喜びを本人に伝えた。この「風呂洗い」行動はその後もつづいた。今は、自分の行動のレパトリーのひとつとして定着し、自発的に風呂洗いをやった後、賃金を受け取っていない。

ところで、外出はできないが消費行動は既にある。「今できる」行動と捉えることができる。この行動を拡大していき、一歩外へ出る行動を自発することができればと考えた。いきなり対面の買物は無理だろうと考え、まずは自販機での買物「自販機でペットボトル飲料を買う」を具体的な目標と設定した。この目標は必ず達成しなければならないものでなく、ただ「こうなればいいね」程度に片隅に思い浮かべておくものである。

自販機であっても外で買物するにはお金が本人の手元になくなくてはならない。小遣いを銀行振込から手渡しに変更することにした。この変更を、本人の戸惑いを考慮し2カ月の準備期間を設けて、2カ月前に本人に伝えておくことにした。また、仕事「風呂洗い」で小銭が本人の手元に残ることになり、手元のこの小銭が消費行動をより促すことになるだろうと考えた。

この間に、本人の祖父の入院といった出来事があり、家族で見舞いに行くことになった。親は本人を誘い、父親の車で一緒に行ったが、これがひきこもって以来初めての外出になった。

このことから、親は「病院見舞い—行動の機会」になると気づき、自転車なら一人で行く機会になると考え、本人に「自転車を買ってあげよう」ともちかけ、本人はインターネットで買い、その代金振り込みに銀行までその自転車で行った。これが一人での初めての外出になった。その後、親は自転車を使っただけの「仕事」を創りだした。入院先での洗濯物の持ち帰り・持って行く、を仕事として本人に頼み、この仕事では親からも行った先の祖父からも「ありがとう、助かった」と喜ばれることになった。この仕事は祖父の退院で終わったが、自転車による自発的な外出行動(早朝のサイクリング)は今も続いている。

「祖父の入院」といった出来事は創りだせるものではないが、その出来事を仕事を創りだせる機会と捉え、仕事「洗濯物の持ち帰り・持って行く」を創り出し、それが「自転車で見舞いに行く」という「行動の機会」の選択肢に繋がり、「早朝のサイクリング」という今も維持されている自発的な行動の成立につながったと言える。

ここまでは家で創出された仕事である。次にグループ仕事としての創出を考えた。親の報告に「インターネットで苗を買い、庭で育てている」というものが含まれていたことから、グループで畑を借り、畑の仕事を創り出すことにした。仕事メニューに「畑仕事の手伝い」を提示したが、仕事メニューの仕事としてでなく、自転車で外出時には、時々、自発的に畑に行き水やりを行なった。

そこで、改めて新たに見合った仕事を創り出すことにした。パソコン操作はかなりできるとの親の報告から、PCを用いてできる仕事、グループ内仕事の「受付用紙作成」を創出した。また、グループ外からの仕事「名刺作成」「説明書清書」を受注した。これらの仕事を本人は毎月1件ずつ選り成立させていった。

そのような中でのある日、本人が自転車での外出から戻ってきて、母親にアイスクリームを差し出した。母親は喜んで「ありがとう、美味しいわ、どこで買ったの?あの自販機で?」と応じると、

本人はデジカメで撮った自販機の写真を見せた。最初目標においていたのは「自販機でペットボトル飲料を買う」だったが、アイスクリームには変わったが行動は生じた。そして、それは自発的な行動である。その後、自販機での買物は、アイスクリーム、飲料水だけでなく農産物の産直自販機での買物へと広がっていった。そこで、仕事「産直野菜買物代行」が創りだされ、すでに本人はこの仕事を3度行なった。

ひきつづきその後も、仕事メニューの選択肢の中にパソコンを用いての仕事があれば、必ずそれを選択し仕事を成立させている。最近では、「原稿修正箇所の打ち直し」「手書き原稿をワードで打ち直しCDに保存」といった外部から受注した仕事を毎月成立させている。また、完成品の郵送、データ送付などをFSJGの他の親や仕事依頼者との間で行なうことができている。さらに、元の原稿返送においては本人のほうから返送の仕方、日時等の提案があった。このことは、当初の「仕事をする一対価を受け取る」といった社会的関係から、さらに社会的関係は広がったことになる。

このようにして「今ひきこもりのままでできる仕事」は、自宅内で親であっても創り出せるものであり、また、必ずしも外へ出向かなくても自宅内で「今ひきこもりのままでできる仕事」であっても、社会的関係は拡大していくものと言える。

3) 「親が援助者であること」と「仕事行動成立の援助」

ひきこもりの原因が親にあるという主張は現在ほとんどないが、親は社会からさまざまな対処責任を負わされている。「いつまで甘やかしている」「家から放りだせ」「家庭の中で解決すべき」、逆に「受容せよ」「家庭でこそ守るべき」などである。

FSJGは当事者本人と親とで構成され、親が中心となって活動している「脱ひきこもり」支援グループであり、当然、親は「援助者」となる。そこで、親が援助者であることについてと、そこから見えてくることについて述べてみる。

親が援助することについては、懸念される問題点として、「客観性」「データの信憑性」「親子(母子)密着」「子のプライバシー」が指摘される。

FSJGでは、以上のような問題点を踏まえた上で、今、一番近くにいる「親」だからこそ、そして、今、唯一接触できる「親」だからこそ、より良い方向に向けての援助者になり得ると考える。

FSJGの基本的な活動内容は、仕事行動の成立を援助するものである。この活動を実際につづける中で、「仕事行動成立の援助」は多くの関係者との連携が不可欠だということがわかってきた。グループ内仕事だけでは選択肢を広げることができなくて、選択肢を広げていくためには、地域の個人、団体、など関係者との連携が必要になる。連携するためには活動を相手に理解して貫く必要があり、自分たちの活動内容をさらさなければならぬ。そのためには、自分たちの活動を客観的に捉えることが必要になる。また、第三者(連携先)が入ることで、データの捏造の余地もなく、そして、必然的に親子密着も起こり得なくなる。

つまり、第三者(連携先)が入ることで懸念される問題点(客観性、データの信憑性、親子密着)は解決されることになった。

また、「仕事行動成立の援助」は、さまざまな関係者が参加しやすいということも言える。FSJGでは、個人、大学、団体などから仕事の提供を受けているが、その際、本人たちに直接関わって援助するのは、ソーシャルワーカー、臨床カウンセラー等の専門家でもなく、ひきこもり支援専門家でもなく、一般のスタッフである。「仕事行動」の成立に関わる援助なので、限られた特別な人では

なくてもさまざまな人が関わることができる。このようにして、本来、第三者が介入しづらい状況、本人たち個々の推移を客観的に表現していくのが困難な状況を、「親が援助者であること」と「仕事行動成立の援助」は可能なものにする。

ただ「子のプライバシー」に関して言えば、情報公開とプライバシー保護といった背反する問題はFSJGあるいは「ひきこもり」に拘らず、どのような対人援助場面でも起こるものであり、すぐ答えの出るものではない。FSJGでは、本人の利益を最優先させながら思考を重ねていこうと考えている。

IV. 今後に向けて

現在、FSJGでは4つのNPO団体と連携し、本人が出向いてする仕事の提供を受けている。それ以外にも個人、団体、大学等からも仕事の提供を受けている。このようなグループ外仕事は本人たちに選択肢をより広げ提供でき、自発的な行動の機会の拡大となる。そのためにも一層社会資源との連携が必要と考えている。また、連携先の仕事内容は、それぞれ団体のスタッフが普段やっているもので、特別「ひきこもり」用に準備された仕事内容ではない、ただ、そこでは、働き方の形が違うことを認められている。

そこで、このような取組みを通して思うのは、「ひきこもりのままでできる仕事」支援でありながら、従来の「仕事」「働く」ということの捉え直しにつながるものなのだとということである。さまざまな就労形態が認められ、就労形態によって不利を被らない、このことは「ひきこもり」に限らずさまざまな困難を抱える多くの人たちの就労を考えたときにも言えることである。これらのことについても引き続き考えていきたい。

引用文献

- Ayllon, T., & Azrin, N.H. (1965) The measurement and reinforcement of behavior of psychotics. *Journal of the Experimental analysis of Behavior*, 8 (6), 357-383.
- Baer, D.M. (1976) The organism as host. *Human Development*, 19, 87-98.
- Baer, D.M. (1998) Commentary: Problems in imposing self-determination. *The Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps*, 23 (1). 50-52.
- 出口光 (1988) 行動修正のコンテキスト. 行動分析学研究. 2. 48-60
- 玄田有史・小杉礼子 (2004) 「ニートフリーターでもなく失業者でもなく」. 幻冬舎.
- 伊藤順一郎・池原毅和・金吉晴・益子茂 (2001) 「10代・20代を中心とした『社会的ひきこもり』をめぐる地域精神保健活動のガイドライン」(暫定版). 障害保健福祉総合研究事業：地域精神保健活動による介入のあり方に関する研究.
- 伊藤順一郎・池原毅和・金吉晴・益子茂 (2003) 「10代・20代を中心とした『社会的ひきこもり』をめぐる地域精神保健活動のガイドライン」(公開版). こころの健康科学研究事業：地域精神保健における介入のあり方に関する研究.
- 伊藤順一郎・吉田光爾・小林清香・野口博文・堀内健太郎・田村里奈・金井麻子 (2003) 「『社会的ひきこもり』に関する相談・援助状況実態調査報告」(公開版付属). こころの健康科学事業：地域精神保健活動における介入のあり方に関する研究.
- Kahng, S. Boscoe. J.H. & Byrne, S. (2003) The use of an escape contingency and a token economy to increase food acceptance. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 36. 349-353.

- 近藤直司(1997)特集/ひきこもりの精神病理 非精神病性のひきこもりの現在. 臨床精神医学, 26(9). 1159-1167.
- 望月昭(1995) ノーマライゼーションと行動分析:「正の強化」を手段から目的へ. 行動分析学研究, 8(1). 4-11.
- 望月昭・渡部匡隆・野崎和子・小野宏・織田智志(1999)強度行動障害を持つ青年期の個人への対応. 選択機会の拡大を含めたプロアクティブ(前進的)な対処の検討. 安田生命社会事業団1998年度研究助成論集. 34. 71-79.
- 望月昭(2001)「障害」と行動分析学:「医学モデル」でも「社会モデル」でもなく. 立命館人間科学研究, 2. 11-19.
- 望月昭(2009) 対人援助学の立場から. ファーストステップ・ジョブグループ(FSJG):対人援助学的「脱ひきこもり」支援, ヒューマンサービスリサーチ, 16.
- Nozaki, K. & Mochizuki, A. (1995) Assessing choice-making of a person with profound mental retardation: A preliminary analysis. *The Journal of Association for Persons with Severe Handicaps*, 20. 196-201.
- 荻野達史・川北稔・工藤宏司・高山龍太郎(編著)(2008)「『ひきこもり』への社会学的アプローチ」. ミネルヴァ書房.
- 斎藤環(1998)「社会的ひきこもり—終わらない思春期」. PHP研究所.
- 斎藤環(2002)「『ひきこもり』救出マニュアル」. PHP研究所.
- 斎藤環(2007)「ひきこもりはなぜ『治る』のか?精神分析的アプローチ」. 中央法規.
- 斎藤環(2011) —ひきこもりのわが子に今できること— 講演:斎藤環氏に聴く ひきこもりへの対応. 東京都.
- 齊藤万比古他(2010) ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン, こころの健康科学研究事業:思春期のひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究.
- 塩倉裕(1999)「引きこもる若者たち」. ビレッジセンター出版局.
- 杉山尚子・島宗理・佐藤方哉・R.W. マロット・M.E. マロット(1998)「行動分析学入門」. 産業図書.
- Skinner, B.F. (1978) The ethics of helping people. *Reflections on Behaviorism and Society*. NJ:Prentice-Hall.
- Skinner, B.F. (1990) The non-punitive society (邦題:「罰なき社会」). 行動分析学研究, 5(2). 87-106.
- 田中俊英・樋口明彦・石前浩之・上田陽子・金城隆一(2005)「分岐点に立つひきこもり—社会的ひきこもりからニートへ?しかし、本来の意味としてのひきこもりは今も長期化し続けている」. ドーナツトーク社.
- 上田陽子・望月昭(2005) 行動分析学的理念に基づく「ひきこもり」援助:ファーストステップ・ジョブグループ, 日本行動分析学会年次大会発表論文集, 23. p58.
- 上田陽子(2009) 活動報告, ファーストステップ・ジョブグループ(FSJG):対人援助学的「脱ひきこもり」支援, ヒューマンサービスリサーチ, 16. 6-27.
- 上田陽子(2010) 家庭において親は「ひきこもり」本人に対してどう対応すればいいのか—「ファーストステップ・ジョブグループ『対応を学ぶ』講座の効果に関する検討」, 立命館人間科学研究, 21. 147-161.

(本学衣笠総合研究機構客員研究員)